



京都の伝統文化を未来へ 生物多様性に取り組む 特定非営利活動法人 KES 環境機構

写真：公益財団法人京都市都市緑化協会

数年後、京都市に緑をたたえた和の花ゾーンが誕生するかもしれない。
KESが核となり生物多様性を軸にした環境活動が未来の夢に向かって走り出している。

京都を超え、全国から支持 KESの手軽な環境規格

KESは2001年、京のアジェンダ21フォーラムによって「京都・環境マネジメントシステム・スタンダード」として規格の初版を発行。国際的な環境規格であるISO14001が、1996年(平成8)に発行され、日本で旋風を巻き起こしているところであった。1997年(平成9)京都市で開かれたCOP3では京都議定書が採択され、持続可能な社会の構築への機運がいきなり高まりをみせ、大企業を中心にISO認証取得が必須となり、企業間の取引に欠かせない条件とさえ言われるようになっていた。

だが、中小企業にとって、認証取得は容易ではない。そこで、ISO14001の基本はそのままに、中小企業が多い京都の実情

に即した環境規格として、KESが生まれた。シンプルであり低コストという、KESが設けた規格は、支持を集める。京都という地域の枠を超えて全国に広がり、2007年に特定非営利活動法人KES環境機構として独立。現在の登録は、全国で4,500件(2015年2月末)を超えている。業種も製造業を中心に、販売・卸売り、サービス業、行政や学校関連と幅広い。



夢を語る 津村昭夫専務理事

環境問題は止まらない 生物多様性も活動に取り込む

省エネ、3Rやごみ減量、グリーン調達などの多角的な分野で目標を設け、審査員が指導のうえ、環境改善活動を行い、審査登録事業を展開していたKES。登録事業者の前向きな取組もあり、全体でCO₂削減効果を上げるなど、一定の成果を上げ、社会的にも評価を得てきた。しかし、見渡せば渦巻く環境問題。時代の目は*生物多様性という新たなテーマに向けられていく。地球を構成する種の絶滅、里山などの生息環境の荒廃、外

来種の侵入による生態系のかく乱など課題は多角的だ。1995年以降、国家戦略の策定後、生物多様性基本法など法律が整備され、COP10 [生物多様性条約 第10回締約国会議] が、愛知県名古屋市で開催されて以降、動きが活発化している。CSR(企業の社会的責任)の一環として推進する事業者も少なくない。

*生物多様性とは 生きものたちの豊かな個性とつながりのこと。地球上の生きものは40億年という長い歴史の中で、さまざまな環境に適応して進化し、3,000万種ともいわれる多様な生きものが生まれました。これらの生命は一つひとつに個性があり、全て直接に、間接的に支えあって生きています。生物多様性条約では、生態系の多様性・種の多様性・遺伝子の多様性という3つのレベルで多様性があるとされています。

伝統文化や生態系を1鉢の力で守る

生物多様性に向けての取組が緊急課題となり、京都市も動き出す。2014年（平成26）「京都市生物多様性プラン」を策定。京都の暮らしや文化を支える生態系や生きものを守ることを目標に掲げた。それに協働する形で動き出したのが「KESエコロジカルネットワーク」というプロジェクトである。もともと京都の伝統文化は、生物多様性との関わりを軸に営まれ、継承されてきた。葵祭とフタバアオイ、祇園祭とヒオウギやチマキザサ、五山の送り火とアカマツ。これらの行事は、植物なくして営めない。しかし、生息地の変化に伴い、伝統行事で重要な役割を担う植物たちには絶滅の危機が迫っている。

KESは、伝統文化を支えてきた植物に着目し、京のアジェンダ21フォーラムや京都市都市緑化協会等の協力を得て、2014年6月、鉢植えでの栽培を進める取組に乗り出す。

これに先立ち、京都駅ビル開発で展開していた「緑水歩廊」と、梅小路公園の「いのちの森」の間を、「緑の回廊ネットワーク」として繋げようということになった。「緑水歩廊」は、開放



育成実習風景

的な階段を利用した雨水などの循環システムによって、京都ゆかりの植物を植栽し、ビル施設に緑の空間を設けたもの。「いのちの森」は、自然の生態系を復元した9000平方メートルの自然空間。それを和の花の鉢植えで繋げる「緑の回廊ネットワーク」の具現化に向け、周辺のKES登録事業者約50団体にフジバカマとフタバアオイの育成を呼びかけた。フジバカマはKBS京都など、フタバアオイはNPO法人葵プロジェクトが、すでに保全に取り組んでいたからだ。18団体がこれに参加し、育成実習を受け、鉢植え栽培を行った。

鉢植えとはいえ、植物は不思議な力を持つ。参加事業者としてフジバカマ1鉢を育成していた京都市南消防署には、思いがけない成果が訪れた。署の一角に置かれたフジバカマは9月、淡い紫色の花を咲かせた。そこへ渡り（長距離を移動する）をするアサギマダラという蝶が、このたった1鉢の花を見つけて蜜を吸いに飛んできたのだ。日々、緊張を強いられる消防職員たちからは、優美なアサギマダラの姿に「緊張がほぐれた」などの声が上がったという。



京都南消防署のフジバカマ

広がれ！緑の輪 京都市全域に

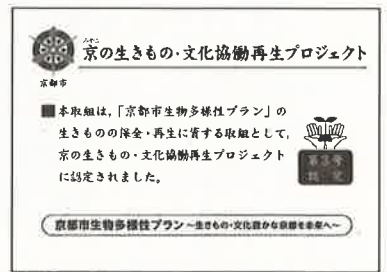
南消防署だけではない。1鉢はそれぞれにエピソードを咲かせた。「職場の空気が和やかになった」「自然を見る目が変わった」などの感想が、参加事業者からKESに届いている。

そんな中、京都市は、伝統文化を育んできた固有の生態系の保全・再生のための活動を支援する「京（みやこ）の生きもの・文化協働再生プロジェクト」と称する認定制度を創設。その第3号としてKESは、2014年（平成26）10月に認定を受け、事業推進の意義を確かなものにした。

2015年、KESはエコロジカルネットワーク事業をさらに拡大展開。京都市内で登録事業者1250団体のネットワークを活かし、フタバアオイ、フジバカマ、ヒオウギ、キクタニギクの鉢植えによる育成に取り組む。今年度は、100団体の参加を

目標に掲げ、新たな参加団体を募集中だ。

KESは今、エコロジカルネットワークを核に、未来に向け構想を描いている。「この動きが京都市全域に広がり、事業所、学校の敷地内での育成や緑化運動となれば…」とKES専務理事の津村昭夫さんは夢を語る。「緑の回廊ネットワーク」を軸に、伝統に根ざした生態系が創成され、東山を包含し隣県へと緑のゾーンが広がれば」とも話す。生物多様性という難題は、同時に大きな夢も運んできた。真正面から立ち向うしかない。



京（みやこ）の生きもの・文化協働再生プロジェクトの認定証

「京都市生物多様性プラン」に基づく「KESエコロジカルネットワーク」に参加しませんか。詳しくは、お問合せください。

特定非営利活動法人 KES 環境機構 京都市右京区西京極豆田町2番地 京都工業会館2F 電話 075-321-4767

<http://www.keskyoto.org/> E-mail: kes-ems@keskyoto.org

◆フジバカマ（藤袴）：キク科の多年草。京都府レッドリストでは、絶滅寸前種。環境省のレッドデータブックでは、準絶滅危惧種。かつて日本では田のあぜなどに群生していた。万葉のころから日本人に親しまれた。秋の七草の一つ。

◆ヒオウギ（檜扇）：アヤメ科の多年草。山野や海岸に自生する。悪霊を払うお守りとされ、祇園祭の飾りに欠かせない。黒い種子は、「ぬば玉」と呼ばれる。和歌では「黒」「夜」にかかる枕詞。

◆フタバアオイ：ウマノスズクサ科の多年草。賀茂神社で冠帽に葵枝を飾る。葵はあふひ＝日向（太陽・別雷（わけいかづち））に通じ、牛車、棧敷、社前に飾る。徳川家「葵の御紋」の基。カモアオイとも呼ばれる。日本の固有種。いくつかの県では絶滅危惧種等に区分。

◆キクタニギク：キク科の多年草。東山を流れる菊溪川の河川敷に自生していたことが、和名の由来。現在は、環境の変化で東山での自生は確認できていない。晩秋に小さな黄色い花を咲かせる。